

[ちくほう地域研究]
 地域をつくる「ふるさと紙芝居」のススメ
 ——高齢者の社会参加の試み——
 筑豊地域研究会会員
 菊ヶ丘「語ろう会」会員
 久門 守



第一話 始まり始まり〜っ
 さてお立ち合い。ご用のある方もない方も、ちよつと見てくれ、聞いちよくれ。ここに並びましたおじいちゃん、おばあちゃん、北九州市は足立山のふもとと寿山（じゅざん）校区からやってまいりました紙芝居屋の面々です。寿山をひっくり返すと傘寿。傘寿をひっくり返すと寿山。八十、九十歳代の「傘寿一座」と六十、七十歳代の「寿山一座」でございます。いつでも、どこでも、だれでもできる紙芝居。電気のない

い紙芝居。結構毛だらけ猫灰だらけ。地元を題材にした「ふるさと紙芝居」の始まり、始まり〜っ。

カチ・カチ・カチと拍子木の音が響いたところで、舞台箱の扉を開けましょう。小倉の中心部から東を向いて、鳥が翼を広げているように見えるのが足立山です。西麓の住民サークル「菊ヶ丘『語ろう会』」（略称「語ろう会」）は、地域調べを、略しては紙芝居で発表するという、ちよつと変わった社



各地を訪問して「ふるさと紙芝居」を上演している「寿山一座」

会参加に取り組んでいます。

これまで発表した十七作品はぜんぶ筑豊を含む北九州地域に題材を求めました。歴史に埋もれた炭鉱、大洪水、文豪松本清張が無名の時代に歩いた道……内容はすべて事実、実話です。ときどきマスコミに取り上げられることがあり、反響や波紋にやる気と色気を出しています。たかが紙芝居ですが、されど紙芝居。平成二十年一月に会をつくって間もなく十年。これを機に少し理屈、へ理屈を交えながら、助け合って歩んできた「なかま旅」の道のりをまとめておきたいと思えます。

第二話 写真がなければ「記憶絵」で

「語ろう会」自慢の紙芝居も、発足時からあったわけではありません。会員の大半が住む菊ヶ丘地区（下富野4丁目のほぼ半分の旧地名）には小倉炭鉱の大きな社宅があり、ヤマは昭和四十年に閉山します。筑豊と違って、工場地帯、市街地と隣合わせだったので、従業員の再就職がスムーズに進み、入居していた人々は土地、建物を払い下げてもらい、ほとんどがそのまま住み続けました。反面、再開発や宅地開発で石炭産業の痕跡は急速に消え、忘れられていきました。「このままでは寂し過ぎる」という声から生まれたのが、地域史発掘を目指す「語ろう会」でした。

元炭鉱マンやかつて「炭鉱主婦」と呼ばれた女性たちは、思い出を語り合いながらつるはしやスコップ、給料袋、図面、日記などを集めて回りました。最も力を入れたのが写真です。坑口、ホッパー（貯炭庫）、修理工場、組合活動の様子、社宅の生活といった約六百枚を提供してもらいました。ですが、坑内や採炭現場を伝えるものは、いまだに一枚ありません。炭層ではガスが発生し、石炭を掘れば粉塵が舞います。

防爆装置が付いた特殊なカメラでなければ撮影が難しいので、一般家庭にはないのです。



「炭鉱主婦」たちはメーデーにも参加していた
(昭和33年 伊藤夫佐子さん提供)

活動を始めて一年たったころ、「記憶絵」という言葉が浮かびました。わたしたちのアタマにはたくさん、映像が残っています。地底などの写真がなければ記憶を絵にすればいいじゃないかと、いろいろ描いてみました。「図画」は尋常小学校でちよつと習っただけの会員ですが、なかなかの出来栄でした。絵地図も含めて三十枚、四十枚とたまってきたとき、多くの人に見てもらいたくなって、ひらめいたのが紙芝居だったのです。一枚一枚に台詞（せりふ）を付けて上手に並べたら、それなりに「物語」になるはず、と考えた次第です。

しかし、会員が紙芝居を見たのはもう半世紀以上前。それどころか、農山村育ちは目にしたことがあり

ません。そうなんです。むかし大流行した紙芝居も、全国津々浦々で演じられたのではなく、子どもの多い都市の路地裏、空き地のお楽しみだったのです。私たちは図書館へ出かけて、基礎知識を仕入れました。街頭紙芝居の実物はありませんでしたが、教育用や幼児向けはかなり収蔵されていました。

第三話 ちよつと紙芝居の歩みを

ここで簡単に紙芝居の歩みを振り返っておきましょう。切り絵や影絵、紙人形、掛け軸、絵巻、大きなものだとステンドグラス、石に彫られたレリーフなど、いわゆる「絵」を見せながら語る文化は、世界各地で花開きました。デジタル画像、CGの現代を迎えても、伝統を受け継いでいる人たちは各地に大勢います。わが国で創り出された紙芝居もこんな絵話（えばなし）



「紙芝居屋さん」を描いた『小倉炭鉱物語』の表紙絵

の一つに数えられるのではないのでしょうか。

「ひとり芝居」として登場したのは昭和の初期です。コマ絵を納める額のような箱は、「舞台」とか「舞台箱」「舞台木枠」と呼ばれ、「語ろう会」では誤解を避けるため「舞台箱」と言っています。紙芝居という言葉は「紙の芝居」「紙の絵芝居」を縮めたものとして定着していったようです。

やがて『黄金バット』や『少年タイガー』など名作が次々に送り出されます。トーキー（発声映画）の普及で職を失った無声映画弁士の参人もあつて業界に「活弁（かつべん）口調」を土台にした独特の術術が広がり、紙芝居の魅力と人気はみるみる高まっていきました。日中戦争、太平洋戦争が始まると軍部や政府の国威発揚、戦争遂行に利用されます。警察の検閲下、『国民みな戦士』『軍神の母』といった軍国ものが増え、子どもだけでなく大人たちも引き寄せられていきました。検閲は戦後も、連合国軍総司令部（GHQ）によって四年ほど続きます。進駐して初めて出会った「kamishibai」（カミシバイ）の、驚くほどの社会的影響力に気付いたGHQは、すぐ取り締まり基準を設け、内容に目を光らせたのです。

紙芝居は簡素で小さなメディアですが、隠れたところに強烈なパワーを秘めています。その源は巨大メディアが持ちえない対面による「目のチカラ」「声のチカラ」にあると、わたしたちは分析しています。ちなみに、当時の「紙芝居屋さん」「紙芝居師」は全国で約五万人。生活は、子どもが小遣いで買う水あめ、せんべい、ニッケ水、酢コンブ、味付けスルメ、型抜きお菓子（通称は「かたぬき」）などの売り上げに支えられました。

『ゲゲゲの鬼太郎』や『悪魔くん』で知られる漫画家水木しげるさんはこのころ紙芝居作者でした。自叙

伝『ねぼけ人生』の一部です。

（紙芝居の仕組みは次のようなものだった。本部があつて：これは、たいてい「○○画劇社」という名称がついている。「画劇」というのは紙芝居の格式ばつたいいかたで：十枚を一組として制作し、これを「一巻」といった。紙芝居作品は学校などでやった教育紙芝居を除くと、印刷をしない。すなわち、原稿がそのまま商品だった。痛みを防ぐために、彩色をしたあと透明ニスを塗った。そしてポロポロになるまで：上演された）

けれども、テレビの普及で紙芝居屋は昭和三十年代の後半、廃業に追い込まれます。水木さんの力作でもテレビには太刀打ちできず（昨日、十人の子どもが見ていた紙芝居が、きょうは八人になっているといったぐあい）、その差の二人とは、テレビを買った家の子であつた。バイニン（紙芝居屋をさす業界言葉。水あめなどを販売する人の意）たちも五円でアメやコンブを売るより、工場に勤めた方がいいと思うようになってた）。こうして街頭紙芝居はバタバタと姿を消していきました。

紙芝居は「過去のメディア」になりました。けれども、歴史に一度登場したメディアで役立たないものはありません。大きな災害で電気が止まると壁新聞が作られたり、旗やたき火、人文字が情報発信に使われたりする通りです。それにメディアのいのちはネット時代になっても、扱う「中身」「ネタ」の質です。時事性や新奇性、着眼点、話題性に秀でていたら、例え出発点が塀に張られた一枚の紙に書かれたコトであつても、必ず社会へ広く伝わっていきます。

第四話 ノンフィクションで勝負

ところで、私たちが絵本や図録、実物で目にした紙

芝居は大半がフィクションでした。対して「語ろう会」の活動は「資料集め、証言集め、現地歩き」を重視する事実路線。おのずと実録型の紙芝居を目指すことになりました。「ノンフィクション紙芝居ですよ」「ドキュメンタリー紙芝居だよ」とPRすれば、「何だ、それ？」「一銭紙芝居じゃないの？」と少しは人の目を引くはず、ともそろばんをはじきました。

出来事や証言を並べるやり方は、話の筋が平板で理屈っぽくなりがちです。が、「事実は小説より奇なり」「人生はドラマよりドラマチック」です。一本の紙芝居に「へーっ、そうだったのか」「まさか」「おやおや」というお話を二つ、いや一つでも盛り込めたら、「起承転結」の「転」と同じ効果が期待できます。また制作に向けた調査の過程や事実認定、推定の根拠を報告文にまとめて添付しておけば、紙芝居自体が後には地域資料としての価値を有します。

私たちは、一人で演じるのは最初からあきらめました。本人がコマ絵を引き、語りをやり、鳴り物を使うのは、難し過ぎるのです。サークル活動では参加者が極めて限られるのも困ります。「語ろう会」では多くが加わり、出演できるように、台詞を作る人、コマ絵を描く人、拍子木をたたく人、舞台箱のコマ絵を引く人、台詞を読む人、司会をする人に分けました。

この分業方式で旗揚げしたのが傘寿一座（十一人）と寿山一座（十人）です。傘寿一座の広石ミツさんと永田章子さんは大正生まれ。多田タケヨ、河津アサエ、神手マサメ、松原清子、田中キミ子、神谷三三子さんたちもそろって八十歳代の後半です。二年前から外部活動は控え、内輪で楽しむだけになりましたが、声はまだまだしっかり出せます。寿山一座は河津文雄、河津幸子、竹本洋子、村松綾子さんが主力メンバーです。要請があれば北九州市内と遠賀郡、直方市、中間

市までは出かけ、市民センターや公民館、生涯学習センター、老人ホーム、小中学校などで年に十数回の上演を続けています。

第五話 こつこつ挑んで十七作

「語ろう会」が「ふるさと紙芝居」と銘打って作品を初めて発表したのは平成二十二年十一月です。傘寿一座が一作目『せきたんマンとたんこうマン』（十一コマ・森山尚二さん画）を寿山市民センターで披露しました。擬人の「せきたんマン」には炭車操縦員だった森重国松さんが扮し、「燃える石」について説明しました。続いて『小倉炭鉱物語』（十五コマ・同）、『小倉炭鉱社ごども生活記』（十五コマ・佐々木サキ子さん画）を制作し、出炭に携わった人々と家族の日々を、ありのまま紹介しました。

幸運だったのは、地元では言わずもがなの話であっても、少し離れた北九州市内や遠賀川流域で「知られていない炭鉱史の掘り起し」として注目、評価されたことです。最盛期も筑豊の大ヤマの陰に隠れていた「まちのヤマ」の紙芝居化は新聞、テレビで詳しく報じられ、翌年の三月には小倉北区役所の勧めで『小倉炭鉱発掘記』（A五判 百六十七ページ）を出版し、完売しました。

地域には歴史がぎっしりと詰まっています。一つのことを調べだすと、次から次へと関係する事象が見つかります。私たちは小倉炭鉱の調査から発見しましたが、寿山小学校は急増する炭鉱社宅の子どもを受け入れるために開かれていました。母親たちの根気強い働きかけが実ったものでした。校名には通常、所在地名を付けますが、「どうして大島ではなくて、寿山なの？」と疑問を持った会員が掘り下げたら、興味深い事実がわかりました。



(1) 「ふるさと紙芝居」を初めて披露する「傘寿一座」と

学制が公布され明治五年の春、足立山麓で初めての公立小学校が広寿山福聚寺内に誕生しました。この学校が「寿山」という名前だったので。足立村（当時）と親たちの拠出でやがて足立小学校が建設され、初代の寿山小学校は消えますが、時が流れて児童の増加で

大島に校舎建設が始まると、この歴史が思い出され、昭和二十七年、二代目の寿山小学校がよみがえったのでした。私たちは「これは面白い！」とすぐ『寿山小学校物語（あゆみ編）』（十コマ・佐々木さん画）にまとめ、学校へも寄贈しました。



(2) 「せきたんマン」に扮した森重国松さん（平成22年11月 寿山市民センターで）



昭和33年に始まった寿山小の学校給食 (佐々木サキ子さん画)

江戸時代にわが国で地域の初等教育を担ったのが寺子屋だったことは広く知られています。お坊さんたちが、庫裏(くり)や講堂で子どもに読み書きを教えたので、あちこちの教場も寺子屋と呼ばれるようになりました。明治なって各地のお寺に小学校が開設されたのは、こんな経緯にあります。「語ろう会」も足立山麓の寺子屋は福聚寺にあった、と思い込んでいました。ところが、桜の名所・足立山妙見宮で会員が故事来歴を尋ねていると「寺子屋はうちにありました」という話が飛び出しました。その証として社務所の奥の間に「学問の神様・天満宮」の小さな社「邸内社」(ていないしゃ)が保存されていました。子どもたちはお宮へ来るとまず「学問の神様」を拝み、それから机の前に座っていたそうです。文字資料にはない、発見でした。こちらは『足立の妙見さん』(十コマ・佐々



邸内社のある寺子屋 (佐々部享二さん画)

部享二さん画)にまとめました。

では、広寿山という山号を持つ福聚寺はどんなお寺なのでしょう。本堂の扉には立派な桃が浮き彫りにされ、周りには赤い欄干が、屋根の上の鯨(しゃち)のような魔除けはインドのガンジス川の神獣「マカラ」でした。寿山は渡来した高僧たちの故郷の山として中国福建省の地図に載っていました。境内にアジア各地の文化の風が吹いています。これは『広寿山と円通寺』(十一コマ・村松正さん画)にしました。円通寺は福聚寺の古い末寺です。

第六話 「記録する会」、マップ、コーナーも

平成二十三年三月、東日本が大震災に見舞われました。大変な衝撃を受けた翌四月の例会で、ひとしきり話題になったのが「二八災」(にっばちさい)北九

州大水害の通称)でした。北部九州は昭和二十八年六月下旬、梅雨の集中豪雨に見舞われ、北九州地域では二十八日の豪雨で山が崩れや土石流が多発、平地はほぼ全域が水没しました。死者・行方不明百八十三人、負傷者六百二十六人、被災家屋八万三千戸……。予備調査をすると被災体験の継承はほとんどなされておらず、資料は散逸し、市民が自由に使える写真もありませんでした。

私たちは「ふるさと紙芝居の定番だ」と張り切って、『忘れまい!足立西麓の、28災』(十一コマ)『子どもたちの大水害』(十一コマ)、筑豊全域の被害を主題にした『遠賀川大水害』(十一コマ)以上いずれも森山さん画)を作り、あちこちで演じました。登場するのは全員、被災体験者です。紙芝居を見た方たちが、ほどなく「北九州大水害を記録する会」(代表世話人の一人は「語ろう会」会員でもある末永裕貴さん)を結成してくださいました。「記録する会」は毎年、「体験継承のつどい」や写真展を各地で催しています。

作家松本清張が朝日新聞社員だったころの紙芝居も作りました。足立山麓には無名だった「清張(きよはる)さん」一家の暮らした「黒住旧居」がありました。が、平成二十五年に解体されました。がっかりした「語ろう会」会員は二年半かけて『足立山とオリオン座清張さんの歩いた道』(上下巻計二十二コマ・森山さん画)を完成させました。報告会を催すと、うれしいことに「清張さんの道を歩く会」が生まれたり、「黒住旧居」のあった町内会が北九州市に働き掛けて、地元公園の名称を「くろさみ清張公園」へ変えてもらったりしました。小倉北区役所は清張が頻繁に歩いた三本の道のイラストマップを一万枚発行しました。清張が校歌を作詞した足立中学校の図書室には約二百十冊を並べた特別コーナーもお目見えしました。「語ろう会」



屋根に避難した遠賀町の人々（森山尚二さん画）

は参考資料や図書を提供して手伝いました。

ことは十月に霊峰・英彦山の麓と東小倉を結んでいた『小倉鉄道・添田線物語』（十三コマ・同）を仕上げました。この線路は小倉鉄道として建設され、戦時買収で国鉄になった筑豊炭田の運炭線の一本でした。清張が戦後、軍靴を履いて新聞社へ通った（線路みち）（『半生の記』）でもありました。

現在は、手分けして『英彦山と小倉鉄道と久女さん』（仮題）に取り組んでいます。主役の杉田久女は英彦山を愛した俳人です。富野菊ヶ丘（現在は上富野一丁目）の自宅から「彦山口」（現添田駅）までは小倉鉄道を利用していました。中腹の奉幣殿近くに「餅して山ほととぎすほしいま、」という代表作の句碑が立っています。

一度発表したものを作り直すこともあります。「語

ろう会」が力を入れていて「わたしたちの『昭和』」は平成二十八年秋までに戦前編（十四コマ・佐々部さん画）、戦後編（十二コマ・村松さん画）がいったんでき上りました。すると、これを見た人たちから「ぼくは『農兵隊』に徴用された」「教練を受けていたときに、広島街へ原爆が投下された瞬間を遠望した。怖かった」「戦前、わたしの母が朝鮮半島の農村で亡くなり、畑で茶毘（だび）にふした」などの体験が次々に寄せられました。そこで、今年二月の例会で「新たな戦時下の体験を加えて再編集しよう」と決まり、聞き書き作業を再開しました。

第七話 コマ絵と共に大事な絵地図

これからは「ふるさと紙芝居」の制作法や上演法を書きますが、すべて「語ろう会」のやり方です。「自己流」ですけれども、「分業型紙芝居」の参考になさっていたら幸いです。

《コマ絵はだれでも描けます》地域調べで集まった事実やエピソード、知られていないお話は平易な言葉で台詞にまとめ、これをコマ絵にします。会には四人の「絵かきさん」がいます。写真集や古いイラスト集、会員の記憶絵、自身の体験をよりどころに描いてもらっています。B四判の画用紙を使用し、下書きの段階で衣類や乗り物の型、街並みなどを会員がチェックしています。

絵柄で留意したいのは、近景・中景・遠景を混ぜる点です。アップの次はロングに、といった構成、進み具合にしています。陰影や遠近は気にしません。輪郭は強調しています。色塗りにはクレパス、色鉛筆、フェルトペン、絵の具などいろいろ使っています。四人とも絵画を学んだことはありません。中心になっている森山さんは八十歳で絵筆を握り、ただいま九十

歳。「絵は文字や地図の元。まだまだわしでもやれるわい」と頑張っています。

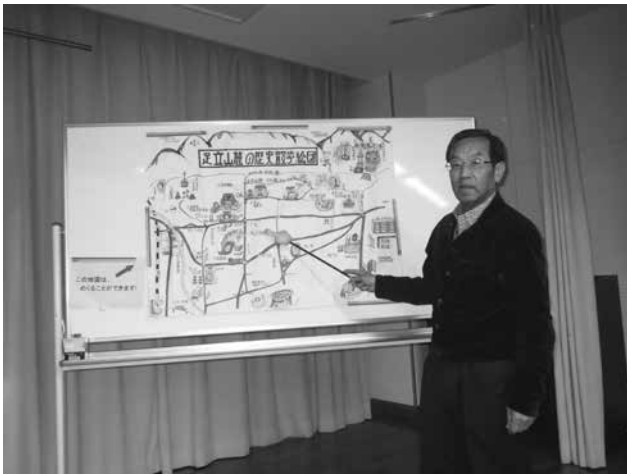


コマ絵を描く90歳の森山さん

絵がそろったらカラー複写し、それを白い画用紙に張るとコマ絵のでき上りです。イラスト風、浮世絵風、洋画風、漫画風と、どれも個性にあふれています。原画は別に保存して、展示会で見ていただくことができます。

なお、「ふるさと紙芝居」は台詞をコマ絵の裏に書かず、「読み札」を別に用意します。コマ絵を引く人（コマ絵係）と台詞を読む人（朗読係）が分かれるので、読み札は欠かせないのです。こちらは持ちやすいサイズの紙にしています。台詞に登場する地名や人名、寺社名など固有名詞にはすべてルビを振って誤読を防いでいます。

《絵地図は大事なわき役です》「語ろう会」はコマ絵



絵地図を説明する村松正さん

だけでなく、模造紙に地域の様子をたっぷり盛り込んだ絵地図も作っています。紙芝居の中身を理解してもらうのに都合がいいからです。

小倉炭鉱関係の紙芝居をするとき、困るのは現地に遺構がまったくないことです。そこで、あらかじめ『昭和三十年の足立山麓絵図』（森山さん作図）で坑口やトロッコ線、発電所、病院のあった場所などを指し示しています。地域史関係では『足立山麓の歴史散歩絵図』（村松さん作図）を用います。こちらは絵地図の一部が二枚になっていて、現在の地域の様子をまとめた紙をバツと外すと、昭和二十年代から三十年代の地図が現れ、そこには廃止された国鉄添田線も走っています。清張の道も、一目で分る絵地図（同）を活用しています。

「地図は北を上」と学校で教わりましたが、「語ろう会」はこだわりません。生活感覚を尊重して、私

ちの絵地図は地域のシンボルであり、目印でもある足立山（東）が上になっています。

《手作りしたりもったり》備品で欠かせないのは舞台箱です。「語ろう会」は最初、手作りしました。粗末過ぎたのでしょね。お客さんから「お金を出してあげるから、いいのを買いなさい」と声が掛かり、慌てて一台購入しました。飾りが少ないものだと一万三千円くらいで売っています。芝居箱を載せる台に掛ける赤い幕は、紙芝居を見た小倉北区今町校区の女性の方たちが会の名前を縫い付けて届けてくださいました。

拍子木は会員が銘木で作り、開会から紙芝居の始まり、終わり、休憩後の再開など機会を見ながら各六、七回たたいています。「足立の妙見さん」では主役のイノシシの鳴き声として「ぶーっ・ぶーっ・ぶーっ・ぶーっ」と「しし笛」を吹きます。この竹笛は小倉南区の長寿者からいただきました。ご本人の手作りでした。コマ絵係が吹くたびに、会場は大きな笑い声に包まれています。

紙芝居は通常、十人から二十人くらいを対象に演じる「極小劇場」ですが、六十人いや百人近くおいでになることもあります。会場が広いときは、末永さんがコマ絵をスキヤニングして、プロジェクターでスクリーンや白い壁に投影しています。この場合も、舞台箱を会場正面に向かって右側にセットし、わきに朗読採用のスタンドマイクを置いています。

第八話 自分の失敗、素早く忘れる

《事前点検が大事です》「ふるさと紙芝居」のスタッフは地味な服装を心がけています。コマ絵をちよつとでも目立たせるためです。朗読係は大声を出さなければなりません。声がかすれたり、声帯を傷めたりしな

いように一本上演でも二人、二本以上だと三人にしています。

芸を分解しましたので、準備段階でチェックを怠ったり、連携がまずかったりすると、うまくいきません。コマ絵係は朗読を聞きながらコマ絵を引き、朗読係はコマ絵の動きに合わせて声を出しますが、失敗の大半は、どちらかの札の順番が間違っているケースです。コマ絵と読み札の事前点検を怠った時に起きます。次に多いのは、コマ絵もしくは読み札を一度に二枚めくってしまう手違いです。紙がびたりとくっついていないことがあるのです。失態に気付くのが遅れたら台無しになります。これらのちょんぼを防ぐために、スタッフは開演の一時前に顔をそろえ、舞台箱を倒れないように設置したり、コマ絵と読み札の順番を二人以上で点検したり、声の調子を確めています。

さりながら（人間は「過失の動物」と随筆家の寺田寅彦は書いています。それに老化は進むばかり。で、「世間では『他人の失敗、厳しくとがめ、自分の失敗、笑ってごまかす』そうですが、私たちは『他人の失敗、笑って見過ごし、自分の失敗、素早く忘れる』をモットーにしております。しくじりは大目に見ていただし、うまく行ったら大きな拍手をお願いします」と断って拍子木をたたいています。

《ときどき顔を上げましょう》お客さんと上演中に向き合うのは、コマ絵係と朗読係になります。ともに紙芝居に引き寄せる重要な役割を担っています。コマ絵係は「無言の指揮者」です。会場を見渡して雰囲気確かめつつ、朗読がおかしくないか耳を傾け、コマ絵を素早く引いたり、そろりと引いたり、絵の中の注目点を指さしたりしています。

朗読係は△ゆっくり読む▽はつきり読む▽正しく読む▽心を込めて読む▽ときどき顔を上げて読む、を大

事になっています。ただし感情移入は控え目にして、声色は用いません。

「ときどき顔を上げて」は重要なしぐさです。お客さんに目で「いかがですか。どうですか」と語りかけののです。「ふるさと紙芝居」はコマ絵の枚数によって、朗読時間が一枚四十秒から六十秒にまとめられています。どの作品も九分～十三分で終わりますが、動画に慣れ切っている観客は退屈しがちです。そこでアイコンタクトによる引き付け効果を大事にするのです。従って朗読係は台詞をかなり暗記しておかねばなりません。

《三つの型で活動中です》演目と時間は求めに応じて変えています。私たちは三つの型を持っています。室内の「お楽しみ型」は四十五分から一時間十五分に協力を求めて、アコーディオン演奏やマジックを組み込む場合もあります。「お勉強型」は調査報告、写真を含む関連資料紹介も組み込みますので一時間三十分から二時間です。途中で十分休憩します。珍しいのは「散策型」だと思っています。紙芝居のあとに、取り上げた現地を訪ね歩くのです。案内役は会員で、各地から参加があり好評です。

お金にも触れておきましょう。活動で必要なのは交通費（ガソリン代・都市高速料金）、会場費（冷暖房費を含む）、時間によっては会員の食事代がいります。会場費は依頼者に負担してもらっています。交通費や食事代は「謝礼」として込みでもらうことがほとんどで、「いただける額」にとどめています。「語ろう会」から金額の提示はしません。ボランティア団体や福祉施設から相談があった場合は、すべてをこちらが負担しています。私たちにとって上演は「多くはない高齢者の社会参加の機会」です。それに「労作の紙芝居」

も、見てもらえなかったら宝の持ち腐れになってしまいます。「良かったよ、とほめられるのが、何よりのごほうび」と仲間たちは喜んで出かけています。

第九話 これから通るきようの道

「語ろう会」会員の大半はネット社会、デジタル文化になじめません。でも、「アナログ、手作り、おしゃべり」なら得意です。会員は、自分たちの身の丈に合った、あの手この手で自己表現に努めています。はしゃぎ過ぎないように、規則に当たる「六つの申し合わせ」には（調べたことを外でみだりに話さず、みんなの役に立つもののみを公表します）という条項を盛り込んでいます。

「他人に話を聞いたり、調べたりした者は後世に語り継ぐ義務がある」と説かれるように、発表は大切な行為です。学者、研究者、ジャーナリスト、ライターといったプロだけでなく、「語ろう会」のような素人のグループにも課せられた責務です。しかし、みんなが生活している地域では、「さずな」と「しがらみ」がこんぜん一体となっています。判明した事実を大っぴらにされて困る人がいないとも限りません。修復されていた人間関係に新たな亀裂が生じることだって考えられます。おおよけにする内容が地域づくりに役立つかどうかは慎重に検討し、誇張は禁物です。

「語ろう会」の紙芝居は、個人が実名で登場するのも特徴です。大水害や昭和をテーマにした作品は、個人の体験をつなぎ合わせた内容ですので、聞き書きを見せて本人の同意を得、試演で台詞を聞いてもらい、その後に発表しています。

信用を保つためには「自分たちで決めたことを、自分たちの方法と責任でやる」という姿勢を堅持しておかねばなりません。もの見方、考え方は会員の間に

議論を重ね、整えています。全員一致は求めませんが、「国があるから地域があるのではなく、地域があるから国がある」という地域主義や、「核廃絶」「戦争絶対反対」は足並みがそろっています。「誠実な人間にも偽善的な面は多くあり、上品な人間にも卑しい面は多くあり、また罪深い人間にも多くの良心がある」（『月と六ペンス』金原瑞人訳）という人間観も忘れないようにしています。

私たちはたまに「なあ〜んだ。紙芝居か」「年寄りの遊びか」と見下され、表現活動には認めてもらえないときがあります。それでも、いじけたことはありません。ゴマもすらなければしつぽも振らず、どこにも所属せず、会費も集めず、ひたすらそれぞれが「自立・自立」の意地を張り通しています。自治体や企業への補助金、助成金の申請は今後もしません。

年寄り笑うなゆく道ぞ。来た道行く道、なかま旅。これから通るきようの道。さ、さ、さあ、もつと寄つて。寄つちよくれ。紙芝居の制作費は担当者が持ち、現地調査はできるだけ徒歩か自転車に乗ってチリンチリン……と、書きつづってきたところで、時間切れ、おしまいを告げる拍子木が鳴りました。高齢者でなければ持ちえない記憶や経験を活用して、あなたも第二、第三の人生を「ふるさと紙芝居屋さん」として、おもしろくおかしくお過ごしになりませんか。はい、お〜しまい！

主な参考文献

会報『通信 このあたりのことを語ろうかい』（一号）（三五九号）

菊ヶ丘「語ろう会」継続中
研究報告『かやのもり』（7号・13号・20号・23号・

近畿大学産業理工学部継続中

- 『小倉炭鉱発掘記』 菊ヶ丘「語ろう会」著
小倉炭鉱発掘記編集委員会編刊 二〇一一年三月
- 『足立山麓の史跡を探る』 足立山麓文化村編著 せい
うん二〇〇四年三月
- 『定点―北九州の近過去 風俗史序説』 瀬川負太郎編
著 小倉タイムス 一九九四年七月
- 『香具師口上集』 室町京之助著 創拓社
一九八七年一月
- 『紙芝居―街角のメディア』 山本武利著 吉川弘文館
二〇〇〇年一〇月
- 『紙芝居の世界』 昭和館監修 メディアパル
二〇一二年三月
- 『紙芝居の魅力』 国立音楽大学幼児教育専攻三年
『専門ゼミⅠ』 一人編著 二〇一四年五月
- 『ねぼけ人生』 水木しげる著 ちくま文庫
一九九九年七月
- 『半生の記』 松本清張著 新潮文庫 一九七〇年六月
- 『杉田久女随筆集』 杉田久女著 講談社文芸文庫
二〇〇三年六月
- 『寺田寅彦全集 第四巻 随筆四』 岩波書店
一九八五年一月
- 『月と六ペンス』 サマセット・モーム著 金原瑞人訳
新潮文庫 二〇一四年四月

ふるさと紙芝居一覧

	題 名	コマ数	製作時期
1	せきたんマンとたんこうマン	11	2010年 3月
2	小倉炭鉱物語	15	2011年 1月
3	ちょっと昔の足立山麓 (写真構成)	14	2011年 8月
4	小倉炭鉱社宅こども生活記	15	2011年12月
5	忘れまい! 足立山麓の“28災”	11	2012年 4月
6	60年前の北九州大水害 (資料構成)	12	2012年 4月
7	寿山小学校物語―あゆみ編一	10	2012年11月
8	はてさて? どうして 足立山麓歴史散歩	8	2012年11月
9	足立の妙見さん	10	2012年11月
10	わたしたちの“昭和”戦前編	14	2014年 3月
11	お滝と水神さま	11	2014年 3月
12	昭和28年 6月28日 子どもたちの大水害	11	2014年 4月
13	広寿山と円通寺	11	2014年 5月
14	遠賀川大水害	11	2014年11月
15	わたしたちの“昭和”戦後編	12	2016年 9月
16	足立山とオリオン座 ～清張さんの歩いた道～	上巻10 下巻12	2016年 9月
17	小倉鉄道・添田線物語	15	2017年10月

絵 地 図

	題 名	サイズ	製作時期
1	昭和30年の足立山麓絵図	大全紙サイズ	2009年10月
2	足立山麓の歴史散歩絵図	模造紙サイズ	2012年11月
3	足立山とオリオン座～清張さんの歩いた道～	模造紙サイズ	2015年 2月

制作準備中

	題 名	内 容
1	英彦山と小倉鉄道と久女さん	調査中